

フランチェスコ・ディ・ジョルジョ工房におけるジャコモ・コッツアレツリ

—4つの《キリスト哀悼》群像に見る個人様式確立の過程—

藤崎(松本)悠子(慶應義塾大学)

15世紀後半のシエナ共和国におけるルネサンス芸術は、建築・絵画・彫刻に優れた万能の芸術家としてその名を知られるフランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ(1439-1502年、シエナ)によって牽引された。フランチェスコに捧げられた『列伝』の一節においてヴァザーリが簡潔に言及したように、彼はジャコモ・コッツアレツリ(1453-1515年、シエナ)という弟子を残している。この人物は建築・彫刻領域における最も秀でた弟子として30年余り師の活動を支え、ウルビーノのモンテフェルトロ公のためのドゥカレ宮建築や、シエナ大聖堂主祭壇を飾るブロンズの天使像制作に携わった。フランチェスコの死後はシエナにおける筆頭彫刻家のひとりとして当時のシエナ僭主パンドルフォ・ペトゥルッチの依頼に従事している。このような重要性を有した一方で、コッツアレツリに確実に帰属し得る作例は、そのいずれもが晩年に置かれる僅か5点しか現存せず、様式上の発展を跡付ける難しさから、芸術家個人としての活動は副次的に論じられるに留まってきた。

本発表では、ジャコモ・コッツアレツリの彫刻制作活動の再構成を目的とする研究の一環として、コッツアレツリとフランチェスコ・ディ・ジョルジョの周辺に位置づけられる4点の《キリスト哀悼》作例をめぐる議論を取り上げる。その中でも15世紀末から16世紀初頭におかれるシエナのオッセルヴァンツァ聖堂聖具室の彩色テラコッタ(素焼き粘土)による作例は、同時代の年代書記者シジスモンド・ティツィオの証言からコッツアレツリの手になることが確実であり、彫刻家が師フランチェスコの影響下から脱し、マニエラ・モデルナとの共鳴を示した最初の作例として認められてきた。

しかし発表者は、コッツアレツリの個人様式確立の萌芽はこの作例以前——すなわち、フランチェスコ工房での徒弟時代——に既に読み取れると考える。そこで、両芸術家が最も密な共同作業を行った1490年代初頭に置かれ、現在フランチェスコへ帰属されている《キリスト哀悼》(サンティ・ジャコモ・エ・ニコロ聖堂、クエルチェグロッサ)を様式的に再検証し、さらにフランチェスコ工房の分業システムにおいて弟子が担った役割を史料から読み取ったうえで、コッツアレツリへの帰属を提案する。この彫刻家が師の傘下にもありながらも独自の造形言語を試みた場となり、オッセルヴァンツァ聖堂の《キリスト哀悼》作品依頼の布石となった作品としてクエルチェグロッサの作例を位置付けたい。